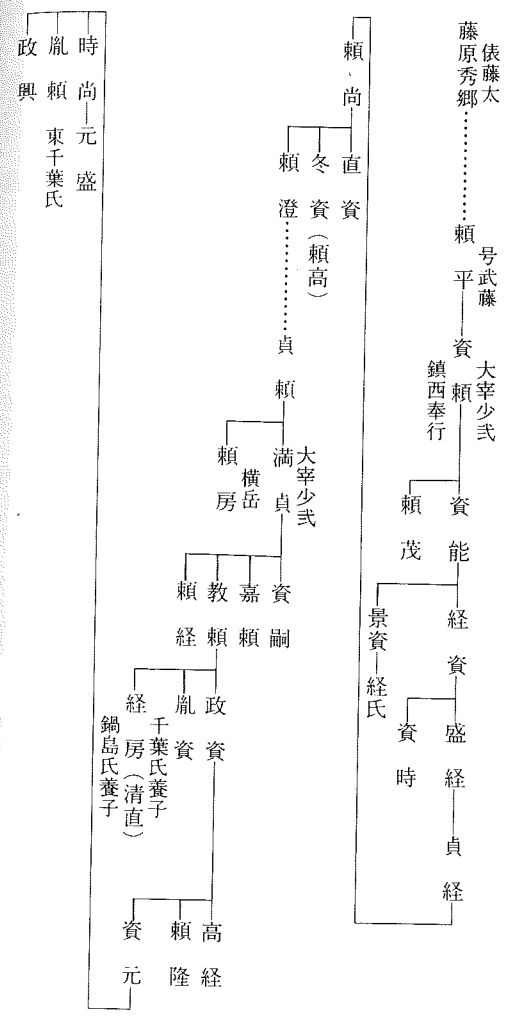


の高木氏以下の御家人とともにこれに応じ、元弘三年（一三三三）五月、鎮西探題攻略に加わった。

かくして幕府は亡び、全国的に諸探題も陥られ、天下は統一された。

ここで建武中興が成り、後醍醐天皇は京都に還幸、因縁深い諸社寺の所領を安堵された。これは、所領であることを確認して、これに保証を与えられたのである。肥前では、佐賀郡春日の高城寺を勅願寺とし、又その寺領を安堵した。すなわち、『高城寺文書』によれば、建武元年（一三三四）十一月十二日付で、内大臣吉田定房の御教

少弐氏略系図（佐賀市史第一巻参照）



書として、高城寺領の河副南北荘内極楽寺免田漆町五段、江上薬師堂免田壹町、河上仁王講免田五段（北方分）、米津土居外早瀧荒野壹所（南方分）等、川副荘内の土地が所領として安堵されている。⁽²⁾

しかし、やがて足利尊氏が謀反し、南北朝時代に入る。九州では太宰府にいた少弐氏をはじめ、豊後の大友氏、薩摩の島津氏などが尊氏側についた。肥前の豪族、龍造寺氏、高木氏、千葉氏なども、少弐氏との関係で北朝側についた。南朝側には肥後の菊池、阿蘇や松浦党があつて攻防をくり返した。尊氏が京都に入ると、諸寺とともに、高城寺の寺領知行地を復活させた。⁽³⁾ 『高城寺文書』には、

肥前国河副荘内極楽寺別当職兼免田等、同米津早瀧荒野等安堵事
と、建武三年（一三三六）十二月十一日付で安堵状を与えている。

尊氏は、九州探題に一色範氏を当てたが、少弐氏がこれを喜ばず、対抗したので、一色氏は京都に去った。

注(1)肥前要略

(2)高城寺文書 五一号(前出)

(3)高城寺文書 五八号

六 室町時代の佐賀豪族

小城の千葉氏は下総平氏に属し、その後裔常胤が小城郡晴氣荘地頭職として世襲した。六代の後、宗胤が肥前千葉氏となった。その後、次第に勢力を伸ばし、長祿三年（一四五九）には、杵島郡長嶋荘に知行安堵し、その

が勢いを盛り返し、九州へ侵入をはじめると、その勢いは強く千葉氏は各地に敗れ、少弐政資は自殺し、千葉胤朝の子胤資も陣没した。ここで千葉興常が大内氏の勢威をかりて、肥前の守護代となった。胤資の遺児胤治、室尼日光、養子胤繁は、一時、小城の高田城に入ったが、翌明応七年、大内方の筑紫満門、東尚盛等の攻撃を受けて、戦い及ばず、川副郷太田に逃れて、旧縁の士のたすけを求めた。

援助を求められた龍造寺胤家は、自ら成富胤秀、木塚直喜ら、および太田和泉守、光増、石井、南里、鹿江、山領等の川副郷の武士もともに加わって出兵応援した。太田での戦いでは勝ったが、やがて形勢は不利となり、胤家は千葉胤繁とともに、一時、筑前に逃れた。

主要参考文献

「九州治乱記」「肥陽軍記」「隆信公御年譜」「歴代鎮西志」「佐賀郡誌」「佐賀市史第一巻」

近世

一 川副地方と龍造寺隆信

(一) 隆信以前の龍造寺氏

戦国時代の争乱の中で、肥前を中心に筑後・筑前・豊後・肥後にまで進出し五州二島の太守と称され、島津・大友とならんで九州を三分する勢力を示したのが龍造寺隆信である。

龍造寺氏は藤原氏の出と称する系図があるが、その出自は明かでない。ただ、龍造寺季喜すまたが小津東郷の龍造寺村（佐賀市城内）あたりを開発した開発領主であり、これが彼の名にちなんで末吉名と呼ばれたと考えられる。この末吉名は川副荘と隣接しており、この地を中心に発展した龍造寺氏は川副地方と深いかかわりを持っていた。平安末から中世にかけて佐賀平野の土豪的存在として高木氏や国分氏とならんで南部で成長し、肥前の龍造寺氏に発展して行くのである。蒙古襲来における龍造寺氏の動き、南北朝期における動向、今川了俊の九州探題としての下向によって、九州の政治情勢が安定したことは前述の通りである。その後、渋川氏が九州探題となったが